

基肄城築造1350年

基肄城を知る①

私たちの町の宝 基肄城跡



皆さんは、町の北側に聳える

基山（きざん）をご存知でしょうか。おそらく多くの方が「当然知っているよ」とおっしゃる

かも知れません。「今さら何を？」という方もおられること

でしょう。なぜなら、基山は、昔から町のシンボリックな存在として親しまれ、草スキー・登山・子供たちの遠足などの憩いの場としても、多くの町内外の人々が訪れてきま

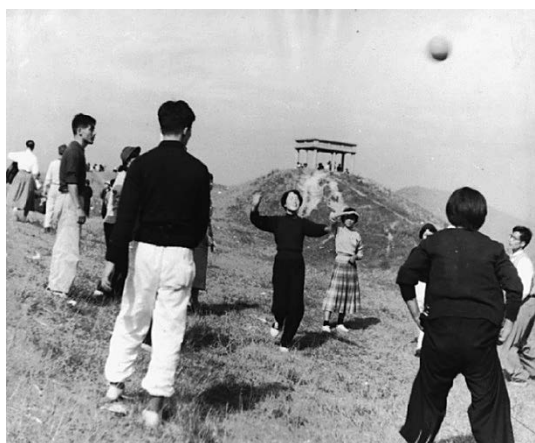
した。また、基山の頂上（標高約404m）からは、町内はもとより、北は博多湾、南は有明海、そして雲仙方面まで見渡すことができるといふ、素晴らしい眺望を楽しむことが



基肄城跡航空写真（背後に大野城跡・水城跡）



基山山頂の基肄城跡土塁線（昭和28年頃）



昭和30年頃（約60年前）の基山山頂の様子

できます。このようなのかな
基山に、日本最古の本格的な山城といわれる「基肄城跡」という宝が残っているのです。
基肄城は、日本書紀の記載によれば、百濟という友好国の再興に協力するため、朝鮮半島に出兵した当時の日本が、663年の白村江の戦いで唐・新羅軍に敗北してしまったことから、次は日本に両国が攻めてくるか

も知れないという危機的状況への早急な対応が必要となり、664年に壹岐・対馬などの北部九州に防人・烽火を配置し、同年に現在の大宰府政庁の北西部に水城、そして翌年の665年に大野城とともに基肄城を築いたのです。このように基肄城は、現在の中国・朝鮮半島という東アジアの国際情勢の中で、我が国が直面した大事件をきっかけ

につくられたのです。
この城は、基山山頂から谷を挟んで東の峰までの60ヘクタールを超える広大な範囲を敵から守るために約3・9キロメートルの城壁で囲み、所々に門を設置し、城内には、主に武器や食料を保管するための建物をつくっています。敵が攻めてきた時には、城内にこもって戦うためのものと考えられています。
基肄城跡は、昭和12年に古代山城として日本の城の歴史を考えるうえで極めて価値の高いものであることが認められて、国の史跡として指定されました。そして、昭和29年には、我が国

の史跡の中でも特に重要なものとして、国宝級である「特別史跡」となっています。これも築城から千年以上という長い間、現在のような良好な状況で守り伝えていただいた、郷土の先人達の努力の賜物であると思われます。つまり、基肄城跡は国の宝であるとともに、町（郷土）の宝でもあると言えるのではないのでしょうか。
基肄城は、来年の平成27年に築造から記念すべき1350年目を迎えます。このたび、これを契機として、基肄城や基山について、本町の歴史研究団体である、基山の歴史と文化を語り継ぐ会の皆さんとの協働により、毎月15日号の広報きやまで紹介させていただきます。

※問合せ先

教育学習課

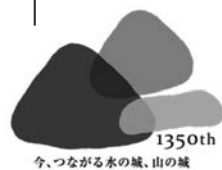
ふるさと歴史・文化係

電話92-2200

基肄城築造1350年

基肄城を知る②

基肄城築造の記録 — 基肄城築造1350年の証 —



基肄城跡は、来年の2015年（平成27年）をもって、築造1350年を迎えます。その根拠となる資料が、実は日本の古代に編さんされた歴史書に記されています。通称六国史と呼ばれ、『日本書紀』『続日本紀』など6つの歴史書から構成されることから、そう呼ばれています。その中の一つ、『日本書紀』に基肄城築造の経緯が記されています。

基肄城築造の経緯は、今から1383年前の西暦631年まで遡ります。時代は飛鳥時代、当時の東アジア世界では、強大な国力を有する唐帝国や韓半島にある高句麗、百濟、新羅の三国による領土争いが繰り広げられていました。『日本書紀』には、後に白村江の戦いに日本を導くことになる二人の人物の記事があります。

一つは、舒明三（631）年三月「百濟王義慈入王子豊幸為質。」百濟王義慈の王子として日本に人質的扱いでやって来た余豊璋、白村江の戦いで百濟復興軍最後の王となる人物です。そしてもう一人、後に統一新羅の基礎を築く新羅王武烈となる人物金春秋が大化三（647）年七月にやって来ます。この二人によって、天智二（663）年八月の白村江の戦いへの道を歩み始めることになりました。

大化三年にやって来た金春秋は、対話能力に長けた人物として『日本書紀』は伝えます。新羅の内乱を治め、すぐさま日本にやって来た金春秋の目的は何だったのでしょうか。それを知る手掛かりは、韓半島における新羅の勢力図が物語っています。当時の新羅は、隣国百濟と高句麗から攻め込まれ、存亡の危機に瀕していました。この新羅を立て直す策として、金春秋は唐との連合を画策します。と同時に、新羅の背後にある日本（當時は、倭と記されています）の懷柔策ないしは叩く策を巡ら

せたとです。『三国史記 新羅本紀』は伝えます。真徳王二十（648）年、唐の皇帝太宗に謁見した金春秋は、新羅の国情を訴え、唐との連合の約束を取り付けます。前年に倭国にいた金春秋は、翌年には唐の皇帝に謁見するという当時の旅程では考えられない素早さで事を進めていきます。倭の国情と百濟王子余豊璋を介した倭と百濟の結びつきを知った上で、唐太宗への謁見を謀ったのです。

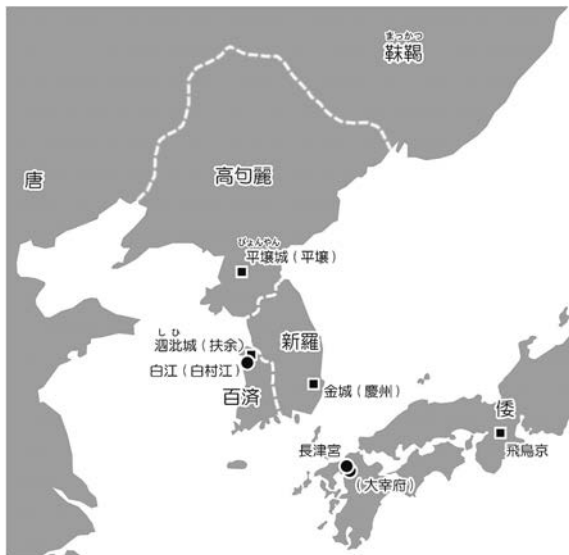
こうして、新羅と唐、倭と百濟の連合軍が形づくられ、天智二（663）年八月、運命の時をむかえることになりました。

韓半島中央部西海岸の白江が、白村江の戦いの地であったと考えられています。時は旧暦の三月（現在の四月）、前將軍上毛氏、中將軍巨勢氏、後將軍阿倍氏ら総勢27,000人の倭軍が百濟復興のため韓半島へ向かったのです。戦いは八月二十八日、その様子を、『唐書 劉仁軌伝』は、「煙炎漲天、海水皆赤（焼ける船の煙が天空を覆い、海水は兵士の血と炎で真っ赤に染まった。）」と記しています。

敗走した倭は、唐と新羅の連合軍が、すぐさま攻め込んでくるといふ恐怖に悩まされることになります。倭は、天智三（664）年、「討馬嶋、走岐嶋、筑紫国等、置防與烽、又筑紫築大堤貯水。名曰水城。」（対馬、壹岐、筑紫の国に防人と烽を置き、また筑紫に大堤を築きて水を貯える。名付けて水城という。）」さらに、翌年の天智四（665）年に「遣達率憶禮福留、達率四比福夫於筑紫国、築大野及椽二城。」（達率憶禮福留、達率四比福夫を筑紫国へ遣わし、大野および椽の二城を築かせる。）」と『日本書紀』は伝えています。ここに記されている「椽」こそ、我が基山町にある「椽城」、そして『続日本紀』文武二（698）年五月条に記される「令大宰府鑑大野、基肄、鞠智三城（大宰府、大野・基肄・鞠智三城を修治す）」とある基肄城なのです。

今、基山山頂にある特別史跡の碑に「基肄（椽）城跡」と記されている理由はここにありま

※問合せ先
教育学習課
ふるさと歴史・文化係
電話92-2200



東アジア世界の勢力図【飛鳥時代】

基肄城築造1350年

基肄城を知る③

新たに発見された通水溝



県道17号久留米基山筑紫野線の城戸インターから丸林集落上方の谷沿いの道を登っていくと、川のせせらぎの中に、石造の鳥居が見えてきます。その左脇には、四角形の石組みがあり、その中から水が流れ出ています。そこには、一見のどかで何気ないような、けれど、何となく由緒あるような不思議な雰囲気が醸し出されています。

囲まれた古代山城です。この城壁は、ほとんどが土を盛った土塁でつくられています。谷部で水が流れているようなところでは、石を積んで石塁としています。水門跡はこの石塁の一部としてつくられているのです。水門跡は、基肄城のほぼ中央の北から南に下る大きな谷部にあり、城内では最も標高の低い

場所につくられています。当然ですが、基山一帯に雨が降ると基肄城内では、中央の谷部で最も低いここに水が集まりますので、城外に排水しなければなりません。また、敵が攻めてきた時に城内に籠って戦う場合には生活水が必要となります。もしかしたら、水門跡は排水だけでなく、貯水のための調節機能も

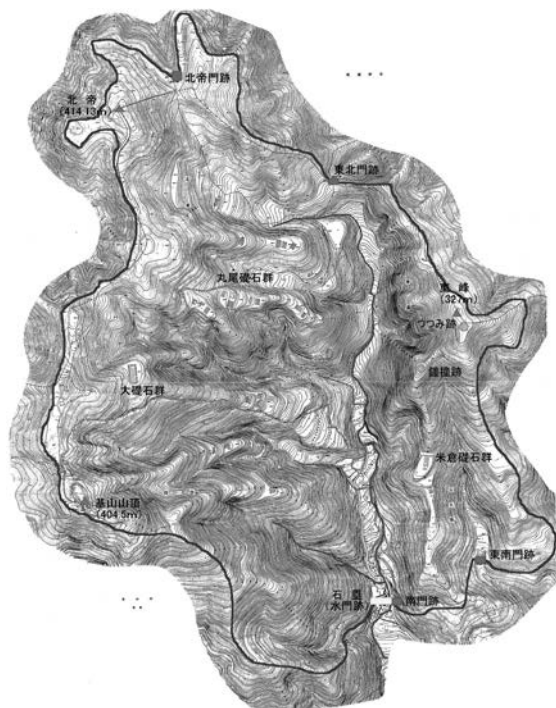
持っていたかも知れません。

水門跡のある石塁は千年以上も残っていましたが、既に崩壊した部分やすぐにでも崩れてきそうな危険な状況もあったため、平成22年より保存修理工事に着手しています。工事は、まず対象範囲の石塁の石材一石ずつを測量しながら解体し、並行して考古学的な発掘調査を実施しました。この基肄城の石塁がどのような技術で積み上げられたか、また何が原因で崩壊したかなどを究明し、解体後の復元的修理工事に際して、築造当時と同じ技術で積み上げ、崩壊しないよ

うにするためです。このような慎重な作業の中で新たに3つの通水溝が発見されました。つまり、基肄城の谷水を城外へ流していたのは、これまでに見えていた水門跡の水口だけではなかった可能性ができました。新発見の通水溝は、その全体を把握できたわけではありませんが、排水機能を持つと考えられるもので、同じ石塁の中に4つの排水口を備えた例は、今のところ韓国の古代山城に確認されてはいますが、日本には例がありません。日本書紀では、基肄城築城には兵法に詳しい百済の高官が派遣されたとあります。高官が派遣されたとありますが、今回の発見は、基肄城だけではなく、日本や韓半島の古代山城を考えるうえで貴重なものと言えるでしょう。

ここは、以前から基肄城の水門跡と呼ばれ、基山(きざん)登山の際の主要な玄関口ともなっています。では、水門跡とはどのような遺構でしょうか。

基肄城は、基山(きざん)山頂から谷を包み込むように東の峰までを約3.9キロメートルの城壁で



基肄城跡主要遺構配置図



新たに発見された3つの通水溝

※問合せ先
教育学習課
ふるさと歴史・文化係
電話92-22200

基肄城築造1350年

基肄城を知る④

古代の法律『令』に定められた防火対策

―基肄城にある建物―



特別史跡 基肄城跡には、現在確認されているだけで約40棟の建物³が確認されています。

それらの建物には、米や武器が納められていたとされ、建物跡のそばから多くの炭化した米が採集されています。また建物跡からは多くの瓦が採集されており、屋根に瓦を葺いていたことも分かっています。基肄城跡で確認されている建物は、その多くが礎石⁴で柱を支える礎石建物⁵で、屋根瓦や中に納められる物の重量を支えるための構造で、これらの建物の多くは、柱や床を支えるための柱を持つ、総柱の建物でした。

実は、古代の日本において、これらの建物にも建てる場所や防火対策について法律で定められていました。その法律が、奈良時代に定められた『大宝律令⁶』、その後多くを引き写した

とされる『養老律令⁷』に見るところができます。

律は現代で言えば刑法、令が行政法で、令巻第九に記された倉庫令第二十に、その内容を見ることができます。「凡倉、皆於高燥処置之。側開池渠。去倉五十丈内。不得置館舎。」という条文です。読み下すと「凡そ倉は、皆高く燥ける処に置き、側に池渠⁸開け。倉を去ること五十丈内に、館舎置くことを得ず。」とあります。当時の建造物は、木造で「鬼火⁹」による火災記事も奈良時代に編さんされた『日本書紀¹⁰』に記されるなど、倉に納められた物を守るためにも防火対策は、欠くことのできない課題であったと言えます。読み下し文からは、倉は乾燥した標高の高い位置に築き、その傍に防火用水としての池や溝を造れと命じています。防火用水



基肄城の礎石建物（米倉礎石群）

としての池は、井戸であるとも考えられ、太宰府の四王寺山にある大野城跡にも鏡ヶ池¹¹やけいさしの井戸¹²が礎石建物跡の傍に掘られています。基肄城跡はどうでしょうか。そういえば、基肄城跡の東には、「つつみ跡」と呼ばれる大きな窪みがあります。かつては、ここに水が溜まり、子どもたちが泳いで遊んでいたと伝えられています。現在、この「つつみ跡」の傍に建物跡は見出されていませんが、建物



つつみ跡

跡の存在を伺わせる平たい地形があります。

これら倉をはじめ基肄城全体を管理する館舎的な建物は確認されていませんが、『令』の規定に防火対策として倉から50丈、現在の尺度で約150メートル離れて建造することが定められていますので、現在確認されている礎石建物跡からは離れた場所を確認されるのかもしれませんが、いずれにしても、基肄城跡の建物をはじめとする各施設は、古代の日本に定められた法律の規定に沿って築かれていたのです。

※問合せ先

教育学習課

ふるさと歴史・文化係

電話92-2200

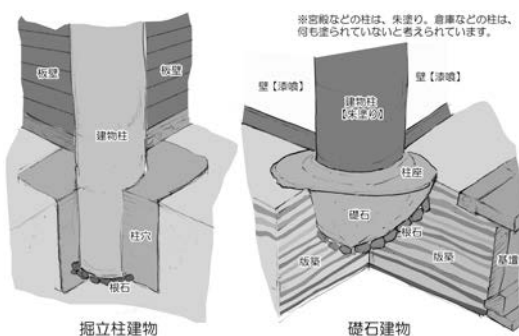
■礎石建物

礎石建物は、柱の沈下を避け、柱を支えるために礎石を据える建物です。古代日本では、主に役所や寺院の建物に用いられました。

■掘立柱建物

掘立柱建物は、柱を支えるために穴を掘り、その穴に柱を埋め込み建物を築くものです。

▲礎石建物と掘立柱建物【イラスト】



基肄城築造1350年

基肄城を知る⑤

基肄城の城壁と門

—土塁、石塁、門礎—

「基肄城跡は、土塁に囲まれている。」

基肄城跡が説明されるときに、よく聞く表現の一つです。それでは土塁とは、一体何でしょうか？

「土塁」とは、土で積み上げた防塁（敵の攻撃を防ぐためのと

り）のことです。土を層状に積み重ねることによって、より固く強くなるようにつくられています。このような方法は「版築工法」と呼ばれ、杵（築）で突き固めてつくったと考えられています（イラスト1）。版築工法は、全国的に古代山城の城

壁や建物の基礎などにも用いられています。

町内では、基肄城跡の土

塁のほかに、南から来る敵を食い止めるためにつくられたと考えられる関屋土塁（JR基山駅近くにある）

イラスト1 版築工法のイメージ



も版築工法によってつくられたことが発掘調査によってわかっています。

一方、土塁ではなく石を積み上げた「石塁」によってつくられているところも基肄城跡で確認できます。

基肄城跡では、推定を含め、北帝門跡、東

北門跡、東南門跡、南門跡（水門跡）の4つの門が想定されています。このうち、北帝

門跡、東南門跡、南門跡（水門跡）では、現在でも積み上げられた石を確認すること

ができ、石塁によって門がつくられていたことが想定できます（写真1）。石塁で地形的に攻めやすい谷部をふさぐことにより、敵からの侵入を防ぐという、城としての防御力を高める目的があったものと考えられます。

石塁を確認できない東北門跡では、門の礎石である「門礎」が残っています（写真2）。このような「門礎」は、基肄城跡のなかでは、現在のところ唯一東北門跡でしか確認されていません。大野城跡では、川の中から門礎が見つかったという例も

あります。かつては、門に設置された門礎が何かしらの原因で、他の場所に動いていることもあるようです。基肄城跡でも今後、どこかで新たに発見されるかもしれません。

門礎は、大きな石に、丸や四角などの人工的な穴があることが特徴です。今度、基肄城跡を散策するときに、探してみたいかがですか。

※問合せ先

教育学習課

ふるさと歴史・文化係

電話92-2200

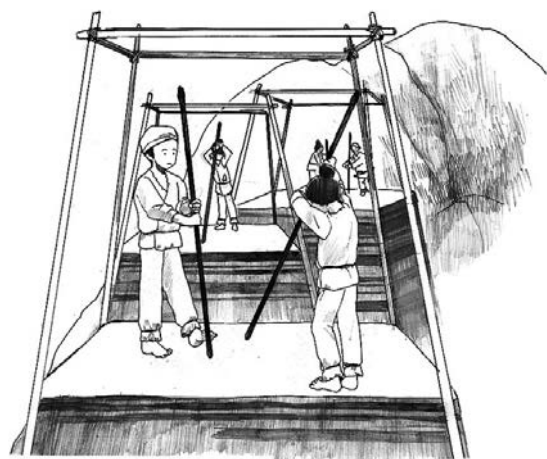


写真1 北帝門跡
写真中央部に積み上げられている石が見えます。



写真2 東北門跡の門礎
丸い穴は、門の扉の軸を受けるものです。
※現在、保存管理のため、見ることはできません。

基肄城築造1350年

基肄城を知る⑥

大宰府の防衛線

昨年は水城が、今年は基肄城・大野城が築造から1350年の節目の年を迎えます。

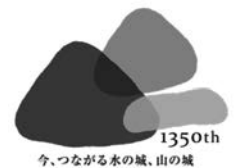
これらは、663年の白村江の敗戦を大きな契機として、我が国防衛のために造られたものとして知られていますが、1350年前という大昔に、当時の日本は、国家の危機を克服するためにどのような国防策をとったのでしょうか。

まずは、朝鮮半島に最も近い九州北部の防備を固めることから始めています。つまり、この一帯に防人と烽火を配置し、博多湾沿岸にあつたと推定される軍事と九州を統括する大宰府を内陸部に移すとともに、この防衛施設を整備しました。これらは、百済の亡命官人の指導のもと、百済最後の都である扶余をモデルとしたと言われており、山や河川など、自然地形を最大限に利用したものでした。

博多湾に面する福岡平野から南方向へ行くとき二日市地峡帯と

いう、東西の丘陵に挟まれた最も平野部の狭いところがあります。ここは、現在もJR鹿児島線や国道3号線、さらに高速道路などの主要路線が集中しており、博多湾から南下して九州内陸部をつなぐ交通の要衝地です。ここを遮断するように、水を貯えて敵の正面にあたる北側に、幅60mもの濠を備えた高さ10mにも及ぶ水城を造り、さらに西側の谷間を小水城で塞いでいます。これらを防衛線としてこの南東部に大宰府を置き、国防のための拠点としたのです。そして、北側に隣接して大野城を造り、北（博多湾側）の守りとしています。さらに、ここから南へ約10kmの地点には、基肄城を造り、しかも基肄城の南東麓の古代官道が走っていたと推定されるルート沿いで、現在国道3号線が通るJR基山駅の北側では、水城と同じ目的で南側から

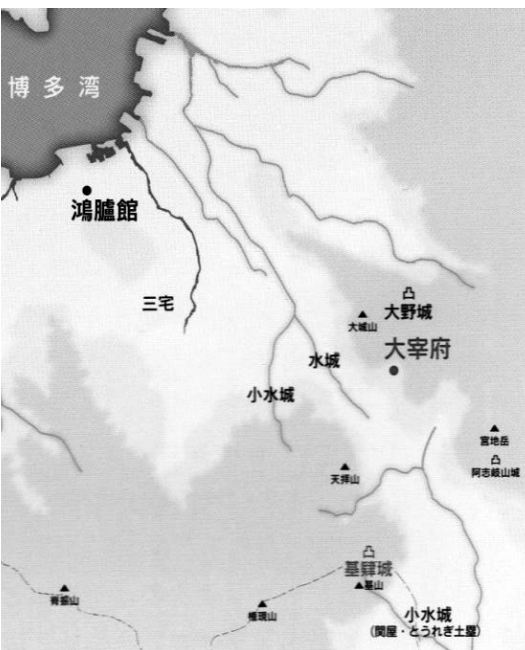
の敵の侵攻に備えるために、関屋土塁・とうれぎ土塁を造るこ



とで、南（有明海側）の守りとしたのです。

このように、大宰府の南北にある軍事・交通等の重要な所には、それぞれ水城あるいは小水城・大野城・基肄城という守りの拠点を配置し、それぞれから延びる天然の険しい丘陵は自然の城壁としてこれらをつなぐように廻り、大宰府を囲んでいきます。このような状況は、地図や航空写真からも容易に読み取る

ことができます。



大宰府を囲む主要史跡位置図

ことができるでしょう。
(左図参照)

昨年頃より、本格的に取組んでおります、水城・大野城・基肄城1350年事業の「今、つながる水の城、山の城」というキャッチフレーズは、1350年の時を越えた関係地域間の交流をイメージしたものでありますが、古代の重要な国防拠点であつた大宰府の防衛線としても、水城・大野城・基肄城はつながっていたのです。

※問合せ先 教育学習課
ふるさと歴史・文化係
電話92-2200



基肄城航空写真（背後に大野城跡・水城跡）

基肄城築造1350年

基肄城を知る⑦

— 基肄城の瓦と瓦窯 —

左の写真は、基肄城から出てきたモノですが、いったい何でしょうか？

正解は瓦です。基肄城の城内には、これまでの調査により、約40棟の礎石建物跡が確認されており、それらの屋根に葺かれていたものが瓦です。屋根に瓦を葺くことにより、建物内を風雨から守ることができます。

現在では、多くの家で瓦が使用されていますが、基肄城がつ



百済系軒丸瓦と重弧文系軒平瓦（大礎石群出土）

くられた時代には、限られた建物しか使用されていなかったようです。一般的な住居があった集落の遺跡では、瓦が出土することが稀であり、板屋根など簡易なものであったと考えられています。その一方で、役所（官衙）の遺跡では、瓦葺きの建物が多く確認されています。このようなことから、集落と官衙の建物では、様子が大きく異なっていることが分かります。つまり、基肄城の瓦葺建物は、その当時の進んだ建築技術が導入されたものであり、国や地方の役所に深く関わった威厳あるものであるといえます。

この写真の瓦には、文様が描かれており、写真上部の丸い形をしたものは「軒丸瓦」、写真下部の半円形をしたものは「軒平瓦」といいます。どちらも、建物の屋根の下端、最も外側にあたる「軒」に葺かれたものです。



建物の屋根を見上げたときに、一番目につくところに設置されたもので、荘厳な雰囲気醸し出していたことが想像できます。実は、この写真の軒丸瓦に描かれた蓮の花のような文様のルーツは、韓半島の「百済」にあるともいわれています。百済にあったお寺や城などから出土した瓦に文様が似ているためです。百済

といえば、基肄城築造にも深く関係していることが文献から分かっています。考古資料からもそのようなことを想定できる資料の一つがこの瓦といえます。ちなみに、百済の瓦については、現在、九州国立博物館で開催されている特別展示「古代日本と百済の交流」

（3月1日まで）において、展示されていますので、自分の目で確認されてみてはいかがでしょうか？

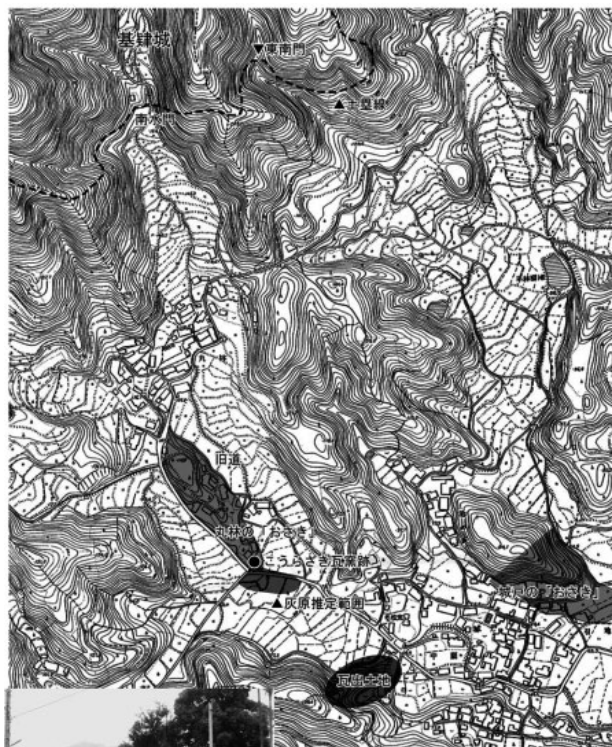
最後に、基肄城の瓦はどこでつくられたものでしょうか？詳しくはまだよく分かっていません。

しかし、町内には「こうらざき（かわら崎）瓦窯」という遺跡があります。基肄城南門（水門）から南東の位置にあります。未調査であるため詳しくは分かりません。しかし、地域の人々の伝承では、「灰がでるから掘ってはいかん。」と言い伝えられ、

守れてきたところであり、実際に灰や瓦が出土したともいわれています。このようなことから、基肄城に供給した瓦を生産した瓦窯であった可能性が想定できます。このほかにも、丸林や仁谷寺でも瓦窯の存在が考えられています。こちらもよく分かっておりません。

今後、さらなる調査や研究によつて、瓦が基肄城に関わる新たな事実を教えてくださいませんか。

※問合せ先 教育学習課
ふるさと歴史・文化係
電話92-2200



こうらざき瓦窯跡（左写真）とその周辺の地形図（上）

（基山町教育委員会2011『基山町史』資料編より転載）



基肄城築造1350年

基肄城を知る⑧

— 荒穂の神さまと基山 —



荒穂神社は、宮浦4区にある古いお宮です。

基山町役場前の道を西に進み、通称5号線のガード下を潜り、そのまま道なりに上って行くと、右手に大きな鳥居が見え、その奥に基山を背景に社殿が建っています。

縁起によると、創建は645〜654年の孝徳天皇の頃で、基肄国造(※1)物部金連の子孫の金村臣(※2)によるとされています。645年と言



一番手前の鳥居から見た荒穂神社
(奥にみえる山の平らな部分
左端あたりが基山山頂)



タマタマ石 (左) と
天智天皇欽仰之碑 (右)

らしています。す。」と神々が言いますと、木の尊は「足下の村にも悪魔が出て人々を苦しめるかもしれないぞ。」

※1 国造…大和朝廷の地方官
※2 「連」・「臣」…日本古代の姓のひとつ。
※問合せ先 教育学習課
ふるさと歴史・文化係
電話92-2200

え、大化の改新で馴染みのある年号ですから、なんとなくその古さが実感できるのではないのでしょうか。祭神は瓊瓊杵尊、他6社(現在は五十猛命も加えて7社)ですが、最初は基山山頂に社殿があり、山頂にあるタマタマ石を磐座とする自然神を祀ってあったと考えられます。荒ぶる自然神が農耕に恵みを与え豊穰をもたらすことから、荒穂と言う名前が付いたのかもしれない。現在地に移ったのが、

今から330年ほど前の江戸時代、五代將軍綱吉の時代の貞享2年(1685年)。度々の戦火で転々として、この地に落ち着きました。

県道の脇に建立された一番手前の鳥居の前に立ち、社殿後ろの基山山頂をご覧ください。その先にはタマタマ石と天智天皇欽仰之碑がそびえています。立地場所にも特別な配慮がなされた事がわかります。

荒穂神社にまつわる昔話が幾

つか残っています。そのなかから『神馬』の話を紹介しましょう。

木の尊がお住まいになつて木の山は、叔父神五十猛命が根の国から八十の木の種を持って来られて、日本で一番最初にその種をお播きになった山であると伝えられています。

木の尊は人々をお慈しみになり農業を教えられたばかりでなく、悪魔が人々を苦しめないように沢山の神様をお連れになつて国々をおまわりになりました。

ある日、木の尊が八百万の神々と一緒に木の山の頂上から広々たる野や山を眺めておられた時に、

と申されました。そうすると、木の尊のお馬が急にたてがみを逆立て、獅子の如く荒れ狂い、木の尊を乗せたまま一声高く「ヒーン」と嘶くや否や、そこから中を駆け巡り、蹄の音も高く何千尺かと思われる谷底まで、一とびにとび下りました。その蹄の跡が今も荒穂の宮の前の石の上に残っていて、「オコシヤスメ」とよんでいます。

(『基山郷土読本』より)

現在この石は、拝殿の東側にあり、横には、木の尊と力比べをした高良の神様が、久留米の高良大社から投げた大きな石も並んでいます。その石には、なんと、高良の神様の指痕が残っています！蹄の跡と併せてご覧いただき、神様のお姿を思い浮かべてみるのも楽しいかもしれません。

※1 国造…大和朝廷の地方官

※2 「連」・「臣」…日本古代の姓のひとつ。

基肄城築造1350年

基肄城を知る⑨

―万葉集に出てくる道、『城の山道』―



城の山道は、はつきりとした

ルートの確定はできてはおりませんが、基肄城東側の山腹を越えて大宰府に向かう道だと思われます。古代の官人や防人、そして民が行き交う古代の道であつたと推定されます。

我が国に現存する最古の歌集『万葉集』にも、この城の山道が詠われています。

今よりは 城の山道は

寂しけむ

我が通はむと 思ひしものを

【訳】これからは、大宰府に通う際の城の山道は寂しくなることでしょう。私は貴方にお目にかかるのを楽しみに通い続けようと思つていましたのに。（巻第四）

作者は、大宰府の役人で筑後

守（筑後の長官格）の任務に就いていた葛井連大成です。交友

のあつた大宰帥（大宰府の長官）の相伴旅人が任期を終え、奈良の都に帰った730年（天平2年）にその寂しさを詠んだものです。

葛井連大成は朝鮮の百済系の渡来人です。城の山道から基肄城の土塁や建物が見えるならば、そこを通るたびに、663年の白村江の戦いの後に、同郷百済の人々の力を借りて造られた朝鮮式山城、基肄城に故郷の風景を重ね合わせて歩いたのではないかと、このひとつの歌から想像が膨らみます。

万葉集の中には、基肄城に登つて詠われた歌もあります。

ほととぎす 来鳴き響もす

卯の花の

判にや来しと 問はましものを

【訳】ほととぎすがこの山に飛び交い、盛んに鳴き立てている。

（もしも相伴郎女が生きていたらつしやる時なら）仲良しの卯の花と共にやつて来たのかとたずねただろうに。（巻第八）

作者は式部大輔石上堅魚朝臣です。式部大輔とは、

礼儀礼式や文官の勤務評定などを司る役所、式部省の次官です。この歌の註に神亀五年

（728年）大宰帥相伴旅人卿の妻大伴郎女、病に遇ひて長逝す。時に勅使式部大輔石上堅魚朝臣を大宰府に遣

して、喪を弔ひ、併せて物を賜ふ。その事既に畢りて、駅使と府の

諸卿大夫等と、共に記夷城に登りて望遊する



大宰府政庁跡（都府樓跡）から南に基肄城が見える
（最も高く平らになっている部分が基山山頂）

日、すなはちこの歌を作る。と

あります。朝廷より大伴旅人の妻の弔問に訪れた堅魚が、大伴旅人や他の役人たちと基肄城に登り、妻を亡くして悲しんでいる旅人を気遣つて詠んだ歌と分かります。

この歌に旅人は、

橘の 花散る里の ほととぎす
片恋しつ 鳴く日しぞ多き

【訳】橘の花が散る里のほととぎすは、散つてしまふ花を恋しく思つて、幾日も鳴きつづけて

います。（巻第八）

と、石上堅魚の気遣いに対して、妻を失った気持ちを歌で返しています。

これらの歌から、奈良の都から来た客人を基肄城に案内したことが分かり、築造から約60年経った頃の基肄城の風景も垣間見ることのできる気がします。初夏の頃、真っ白な卯の花が咲き、山の彼方此方から聞こえてくるほととぎすの声。眼下に広がる山野。その彼方には整備された大宰府の都が見えたかもしれません。また、大宰府から気軽に來ることができ、備されていたことも分かります。

※問合せ先

教育学習課

ふるさと歴史係

電話92-2200

基肄城築造1350年

基肄城を知る ⑩

— 記録に見える軍団、『基肄団』 —



日本の古代における大陸の脅威からの国防の最前線として、また、大和政権の九州（西海道）統括の地として築かれた基肄城。その性格からみて、この地に今でいう軍隊的な性格を有する組織が置かれていたことは十分想像できます。

に配置された人々の姿をイメージすることは、極めて困難な作業なのです。

しかし、西海道の守りとして組織された各国の軍団の中で、唯一、記録にその名を留める軍団が、我が町がある基肄郡の名を配した『基肄団』です。

日本古代の法律である『令』の規定には『軍防令』があり、軍隊的な性格を有する組織を「軍」「軍団」として記されています。この『軍防令』の規定には、軍団の編成や兵士が自ら備えなければならぬ武具・道具類が記されていますが、軍団が具体的にどこに施設に配置されていたのかを知る記録はあまり残されていません。また、大宰府が管轄していた西海道における具体的な軍団名を推量するに足る記録も僅かしか残されていません。したがって、基肄城内

『軍防令』の条文では、第1条に「凡軍団大毅、領一千人。少毅副領。校尉二百人。旅師一百人。隊正五十人」と記され、各階級が引率すべき兵士の人数が規定されています。その中の1人「校尉」についての記録として、平安時代、弘仁4（813）年に肥前国小近島（現在の長崎県北松浦郡小値賀町と推定されています。）で起きた事件の記事中に出てきます。

「時は、平安の世、弘仁4年3月18日。韓半島にあつた新羅の国から110人もの人々が肥前

国小近島に襲来した。島の人々は応戦し、襲来した新羅人9人を殺し、101人を捕獲した。」と記されています。

この事件を、小近島を管轄する肥前国司へ報告したのが基肄団校尉貞弓等であつたと『日本紀略』（『日本後紀』）を書き写し編さんしたもの」に記されています。「校尉」とは、現代での部隊長の役割を担った人物で、東アジアの大陸諸国と国境を接する肥前国にあつて、「沿岸警備隊」の役割を担った人物であつたと想像できます。さながら今の尖閣諸島での有り様と同じではなかつたのでしょうか。

軍団の名称は、太宰府市で見つかった印章、「御笠団印」「遠賀団印」などの限られた資料に見られ、旧郡名を冠した名称であり、郡を単位に編成されていたことが分かります。そうだと

すれば、事件が起きた小近島は、基肄郡から遠く離れた松浦郡に位置しているにも関わらず、所屬する松浦郡に縛られることなく肥前国司の裁量で動いていたことが分かります。

ちなみに、軍団には、おおむね21歳から60歳までの成人男子（正丁と呼称されています。）が徴兵され、さらに弓、大刀など身辺の武具や食糧は自ら準備して臨まなければなりませんでし

た。

特別史跡基肄城跡を見るとき、単に史跡という姿だけでなく、そこで活動した人々の姿、さらにはその背景にある「戦い」の姿を忘れてはならないでしょう。

※問合せ先

教育学習課

ふるさと歴史係

電話92-2200



小近島（小値賀島）と基肄城

基肄城築造1350年

基肄城を知る

11

―鎌倉・室町時代の基肄城―



特別史跡基肄城跡は、日本の

国家形成を考える上で欠くことができない存在として、佐賀県で初めて特別史跡に指定されました。一方でこの基山は、古代の遺跡そのままを私たちに見せているのではなく、古代以前から現代までの人びとが手を加え、さらに自然の猛威の痕跡など様々な歴史の積み重なりを私たちに見せてくれています。

今回からは、その一つひとつの積み重なりの中から、主だったものを取り上げて記していきます。まず、手始めに古代山城として築造された基肄城のある山、基山が、再び「お城」として利用されることとなった時代について記してみます。

時は、鎌倉時代から室町時代、いわば武士の台頭によって始まる中世の出来事です。記録では、基肄城ではなく「木山城・城山

城」として伝えられています。

もともと、記録に残されている時代は室町時代の初期、世を二分した南北朝のせめぎ合いの中、九州の南朝勢力を抑えるために遣わされた幕府の九州探題今川了俊が、南朝方の勢力圏内であつた太宰府を制圧した後、応安4(1371)年に城山(木山)に布陣したことを伝えています。さらに、今川氏の後に九州探題となる渋川氏、時の探題渋川教直による少弐氏一党の掃討作戦の際、周防の大内政弘に布陣して欲しいとの要請をおこなった城としても書状に残されています。その後、渋川氏と少弐氏の勢力争いの中で、しばしば木山城が登場してきます。

この木山城については、江戸時代の秋月藩士大倉種周が作成した『古戦古城之図』の中に「肥前國基肄郡城山古城之図」とし

て残されており、現在、特別史跡基肄城跡の中に室町時代に刻まれた「城」としての記憶をたどることができます。その一つが、基山の山頂にある、通称「いものがんぎ」と称される「畝状豎堀群」で、その時の姿を見ることがができます。

平成24年度から始まった基肄城跡南水門調査では、基肄城築造時期に使われた食器が僅かに出土しています。それらの多くは鎌倉時代から室町時代の坏、皿、土鍋で、少数ですが中国から輸入された陶磁器や滑石製の石鍋も出土しています。これらは、同時代に南水門付近で、食事行為を行っていたことを表す物証といえるでしょう。

基肄城は、地域勢力が分立していた豪族社会から、律令制に基づく中央集権国家へ変貌しようとしていた古代初期の世にお

いて築造された城でした。世は移り、武士による地域勢力分立社会から、織田、豊臣、そして徳川による武家統一社会に至る戦乱の世の中で、再び城として利用されることとなったのです。

※問合せ先

教育学習課

ふるさと歴史係

電話92-2200



主郭と畝状豎堀群 (通称 いものがんぎ)

(佐賀県『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』第六輯 1938年より)

基肄城築造1350年

基肄城を知る

12

— 絵画資料にみる基肄城 —



基山には、江戸時代の基山の地理を知り得る資料として現在の地図に匹敵する絵図が残されています。

今回取り上げる資料は、そのひとつ、基肄城に特化して描かれた資料で、文化9（1812）年の写しとして知られる、『椽之城 太宰府舊蹟全図 南

（以下「南図」と記載）です。

この絵図には『大野城 太宰府舊蹟全図 北』が存在し、南北両図を合わせて、絵図名称が示すように「大宰府」に関わる旧蹟を表現しています。基肄城が描かれている「南図」には、基肄城跡の土塁・石塁線が描かれ、その中に水門や礎石とともに、

当時呼称されていた地名などが記されています。

描かれている土塁・石塁線を見ると、昭和23年に撮影された航空写真から復原される土塁・石塁線に極めて近い形で描かれており、当時の描写力の高さを改めて知ることができます。

この「南図」の中には、気になる地名がいくつか記されています。全てを記すことはできないので、皆さんに知っていただ

きたい2箇所を紹介しましょう（詳細は、『基山町史 資料編』をご覧ください）。

●「北ノ御門」

今は、「北帝門」として知ら

れている箇所に、この絵図では「北ノ御門」と記されています。基肄城の北の門、いわば大宰府から入るための正門にあたるものと考えられ、江戸時代の描写者の認識で「北ノ御門」と呼称していたものです。読みから考えると「きたのごもん」「きたのみかど」の両者があつたと想定でき、後者の読みに対する当て字が「御門」から「帝門」に変化したのでしよう。地名は、読みが優先され、そこに当てられる

字は、その時々によって変化している一例と言えます。

●「塔ノ礎也」

もうひとつ、

「南図」の北西域に「塔ノ礎也シン柱穴旦リ 壺尺八寸」

と記されています。基肄城からは、奈良時代後半の食器（須恵器の蓋）に「山寺」と墨書したのも出土しており、南の護りである基肄城にも寺院があつたことを伺わせます。

奈良時代後半の社会情勢は、白村江の戦いに勝った新羅が再び日本に攻めてくるという噂や、唐の皇帝への拝謁席次に端を発した新羅との確執から、新羅の国王を呪詛（呪い殺す）するため四王院を築くという事態が生じていました。

基肄城跡では、現状で絵図にある位置に、この記載に匹敵する礎石は見つかっていません。絵図が描かれたときから、城内で植林が行われていますが、地形を大きく改変するものではないことから、今後見つかるかもしれません。

※問合せ先

教育学習課

ふるさと歴史係

電話92-2200



椽之城 太宰府舊蹟全図 南
(福岡市博物館所蔵 ※抽出・改変)



昭和23年撮影の航空写真

基肄城築造1350年

基肄城を知る ⑬

—基肄城を国の宝へと押し上げた人—



基肄城跡は、昭和12年に我が国にとって歴史上または学術上価値が高いことが認められ、国の史跡に指定されました。そして、昭和29年に国指定の史跡の中でも、特に重要なものとして「特別史跡」に指定されました。文化庁のホームページでは、国が指定した史跡は全国で1,724件あり、このうち61件が特別史跡として指定されています。つまり、基肄城跡は、国指定史跡のうち僅か3パーセントにあたる特別史跡の一つとして、まさに我が国の宝と言うことができるのではないのでしょうか。

山城として再利用された後、近世時に『筑前國續風土記』・『太宰管内志』などに紹介されましたが、内容や学術的価値については、未だ言及されませんでした。その後、明治末期頃の「神籠石論争」の中で基肄城が取り上げられたことがありましたが、大正元年の内務省技師で朝鮮古蹟調査の実績を持つ関野貞氏の現地踏査により、基肄城が立派な朝鮮式山城であり、665年に大野城とともに築かれた『日本書紀』に記述の椽城（基肄城）であることに疑う余地はないと断定されました。これを機に、その後の本格的な研究と価値を広めるための活動が始まりました。

当時は、基山町（当時は基山村）在住で専念寺住職をされていた久保山善映氏でした。昭和12年に発行された『肥前史談』では、久保山氏の功勞について「基肄城址の研究調査に一身を捧げ此間實に前後通じて二十餘年其の研究調査の為に付登山すること五六百回の多きに及び而かも一切人手を借らず自費を抛ちて苦心慘憺資料を蒐集し遂に我國の歴史上重要な遺蹟なる事を天下に闡明し續いて肥前史談會を動かし天智天皇の御偉業を顕彰すべく記念碑を基山頂上に建設するに至ったのである。」との記述があります。このように久保山氏は、基肄城に対する研究や周知化のために、長年にわたって骨身を惜しまず

精力的に活動し、その成果を多くの論文や講演として発表することで、基肄城の価値を広く世に知らしめることに尽力されました。積み重ねられた実績により多くの人々に影響を与え、久保山氏も発起人の一人として名前を連ねた肥前史談會主催の寄附活動により、昭和8年に現在も基山山頂に聳える「天智天皇欽仰之碑」の建立に至りました。

また、国の史跡指定についても、当時の県知事の紹介により上京のうえ直接文部省に出向き、指定への促進を陳情されています。久保山氏は先述した大正元年の関野氏の現地踏査に随行されており、その時のことを昭和13年の『肥前史談 基肄城址史蹟指定記念號』で次のように記されています。「関野博士登山の結果従來學者間に神籠石、並に其の水門として議論されてゐた住吉神社境内の遺跡が、基肄城址に相違ないと發表されるに及び、若駒の春草に出遭つたやうにピッタリ引きつけられたのだった。」この一文は、間違いなく大野城とともに築かれた基肄城であるとの確信を得た久保山氏の基肄城への愛着と、その後の活動への決意が込められたものではないかと思われま

す。基肄城は、国の宝として今年で築造1350年を迎えています。久保山氏の多大な功績があつたとはいえ、長い年月の間、良好な状況で保たれてきたのは、記録に残らない郷土の先人たちの労苦の賜物であること、そして久保山氏の活躍以後についても、現在もなお基肄城の保存活用に心を砕かれている多くの個人や団体の方々がおられることを、文末ではありますが申し添えます。

※問合せ先

教育学習課

ふるさと歴史係

電話92-2200

基肄城築造1350年

基肄城を知る

14

— みんなで手入れた山、基山 —



基山町では、大正天皇即位を記念して、基肄城跡内に「記念学校林」を設け、以後幾太郎氏の援助により後世に受け継がれることとなります。

次の世代に受け継ぐ「基肄城跡」

んどが町有地となっています。郷土の先人達の努力により守り継がれてきた大切な基肄城跡を、後世の人々に引き継ぐことこそが現代に生きる我々の責務ではないでしょうか。

※注 つばな（茅花）

方言「つばな」。草原に生えており、かつては穂が出る前に食べられていた。

※問合せ先

教育学習課

ふるさと歴史係

電話92-2200

基山山頂駐車場から頂上を指して50mくらい登ると、右手前方の木々に囲まれた所に、石柱の記念碑が建てられています。その記念碑には「日本植林発祥の地」と刻まれていて、「緑化の父」と呼ばれた徳川宗敬書とあります。

そばの案内板によると、



「日本植林発祥の地」記念碑

『ここ基山から東に続く丘陵地は筑紫の名の発祥地で、わが国最初の植林地と伝えられる。日本書紀に次のようにみえる。「初め五十猛神天降ります時に、多に樹種を将ちて下る。然れども韓国に殖えずして、盡に持ち帰る。遂に筑紫より始めて凡て大八洲国の内に、播殖して、青山に成さすということ莫し」とあり、江戸時代の学者貝原益軒・明治時代の文学者久米邦武博士によつて、「筑紫」とはここ「きのやま」（基山）と断定され、日本で最初に植林が行われた地といわれています。

植林の山（梁井幾太郎氏）

全国的に植林事業が奨励されるようになったのは、明治30年

代からです。

佐賀県内では、明治37年度から大正10年度までに合計600町歩の植林が実施されたと記録にあります。

基山町での植林事業には、梁井幾太郎氏が大きな役割を果たしています。

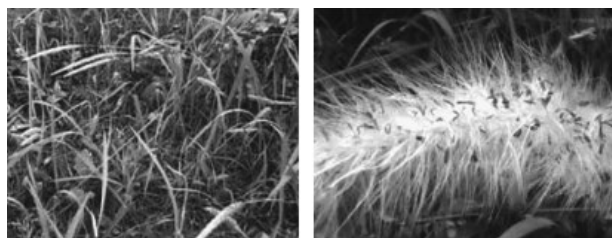
幾太郎氏は、佐賀県での林業講習会へ参加したり、先進地（和歌山県・奈良県）視察に派遣されるなど、明治42年頃から山林の植林事業に力を注がれました。また、植林地で硫酸（硫酸アンモニウム）を施肥として使用する方法を世界で初めて実践するなど研究熱心でもありました。後に佐賀県の林業発展のために尽力し、産業功労者として表彰もされています。

『きの山のつばな ※注 穂に出て風ふけば風のままに打ちなびくなり』

一刀研二

現在の基山一帯は、大部分が戦後に植えられた杉やヒノキなどの人工植林に覆われています。基山山頂南西側斜面には、町によつて桜が植栽されており、その西側には、サザンカやつつじが植えられていて、春や秋には美しい花々を見ることが出来ます。また、貴重な植物である「翁草」などの生育地としても知られています。

基肄城跡の土地所有者状況は、平成3年の町有地面積はわずかに7・2%でしたが、現在はほと



つばな（茅花）

基肄城築造1350年

基肄城を知る

16

—草スキーも有名な基山—



基山きざんといえば、何を思い浮かべますか。

基肄城跡、小中学校の遠足、ハイキングなどをイメージされる方も多いでしょう。その中でも、基山きざんについて広く知られているものの一つが「草スキー」です。草スキーは、町の有名な観光スポットの一つでもあります。

草スキーのシーズンは、3月5月と9月中旬～11月となつて



写真1 草スキー場から上を望む
(中央に見える高まりが土塁)



写真2 かつての草スキーの風景
(昭和46年刊行『基山町史』より一部改変・転載)

います。現在、スキー場の天然草を保護するために、プラスチックスキー板の使用は禁止されています。そのため、シーズン中は木製スキー板の貸出しが行われており、1台300円で借りることができます。土・日曜日、祝日は、基山公園駐車場から上がった左手にある小屋で貸出しが行われており、山頂へ続く丘陵や傾斜面が滑る場所になります。ちなみに、スキー場

から山頂を見上げると、傾斜の強い部分があります。これが基肄城を取り囲む「土塁」の一部です(写真1)。

シーズンになると、多くの家族連れが、予想以上に出るスピードを体感しながら、草スキーを楽しんでいます。今年は基肄城築造1350年記念事業の一つとして「草守基肄大会」が開催され、タイムを競い合いました。

草スキーがいつから始まったのか正確には分かっていませんが、昭和10年代に記された『基山郷土読本』の中に、「19 草スキー」という項目を確認できることから、少なくとも約80年前には草スキーが行われていたことが分かります。また、昭和20年代の広告からも基山のにぎわ

いを知ることができます。基山ラジウム鉱泉(基山ラジウム温泉)が発見された際、基山町商工会は、町の観光目玉として「秋は招く基山ハイキングの好季節」をおかえりは 基山ラジウム温泉へ」と宣伝しています。ここには、ハイキングとしか書かれていませんが、その頃の新聞に基山の草スキーを取り上げた記事もあることから、ハイキングとともに、草スキーも盛んであったと考えられます。昭和46年に刊行された『基山町史』には、「高さ四〇四米、現在は単なるハイキング、ピクニックのみならず、九州随一のローンスキーのローンスキー場として知らせ、年間数十万人の登山客を迎えている。」と書かれており、九州随一と掲げられているほど一大観光地として盛り上がっていた様子が見えそうです(写真2)。

また、かつては草スキーだけでなく、冬にはスキーも楽しむことができたようです(写真3)。昭和30年代に撮影された写真を見ると斜面がグレンデになって

おり、ストックを持って、スキー板を履いた大勢の人が楽しんでいます。しかし、現在は写真のように雪が降り積もることがほとんどないため、冬にスキーをするのは難しいようです。

このように、基山を舞台とした草スキーを紐解いていくと、多くの人が関わっていた歴史があります。草スキーは、後世に伝えていくべき、基山町の大切な文化遺産の一つといえます。

※問合せ先

教育学習課

ふるさと歴史係

電話92-2200



写真3 かつての冬スキーの風景
(昭和46年刊行『基山町史』より一部改変・転載)

基肄城築造1350年

基肄城を知る ⑬

—きやまのお潮井取り—



基肄城の城壁の一部である水門跡が、お潮井取りの場になっていることを存じでしょうか。お潮井とは、海・川の砂や水のこと、それを掛けることで身を清め、災いを除くといわれています。

水門跡がお潮井場と分かるものの一つに、追分石（道しるべ）があります。

丸林集落から水門跡方面、キャンプ場方面への別れ道である三差路に建っている石碑面には、「右はるだ 左筒の志をひ むさし」と彫られています。これは、「右に行く」と原田、左に行くと筒の潮井、その先は武蔵（今の筑紫野市の武蔵寺辺り）に通じている」という意味です。城内から水門へ流れている川が筒川なので、「筒の志をひ」は、水門跡を指すと思われる、古くからお潮井取りの場であつたことがうかがえます。

お潮井取りと聞くと、ニュースなどでよく目にする、博多山笠のお潮井取りの風景が思い浮かぶのではないのでしょうか。締めみ姿の男衆が、箱崎浜でお潮井（真砂）を升やてぼに入れて持ち帰り、家を出入りするときに身に振りかけて心身を清めます。

町にも、祭りのときや1年の節目節目にお潮井を取る行事があります。園部くんちでは、行列の先頭で神水桶を持った2人がお潮井を撒き、道を清めます（写真1）。その神水は、現在、宝満宮境内の井戸水ですが、以前はどこかのお潮井場から汲んでいたのではないかとわれています。荒穂神社の横を流れる川は潮井川と呼ばれ、お潮井取りの場があり、本殿横のお潮井台には砂が奉納されています（写真2）。



写真1 園部くんちの神水撒き



写真2 荒穂神社のお潮井台



写真3 丸林のお潮井たごと杉の枝

町内には、1年中お潮井を取る組合もあります。丸林では、「おしおい参り」が続けられており、水を入れるお潮井たご（小さな桶・写真3）が、家から家へ順に送り渡されています。それが手元に届くと、朝早く水門跡でお潮井を汲み、1.5km下った所にある城戸の老松宮へ参ります。家に戻って玄関や家の周りに撒き、敷地を清めて家内安全を願います。そして、たごは

次の家へ回していきます。小原の隼鷹天神でも、水門にお潮井を取りに行く神事が行われています。7月の願成就の際、4か所の地名を書いた小さな紙をお盆に載せ、その上で数珠の房を動かし、房に付いてきた紙の場所がお潮井取りの場となる神事です。その場所は、「久留米の高良大社」、「太宰府天満宮」、「丸林の住吉神社（水門）」、「隼鷹天神（隼鷹天神の場合は、お百度を踏む）」です。昔は組内で揃ってお潮井取りに行っていたようですが、現在は決められた日にそれぞれで向かい、お潮井を持って隼鷹天神に集まります。境内にお潮井を撒いた後は、社殿に上がり談話をします。

子どもから年配の方まで幅広い世代が集まり、持ち寄った菓子や漬け物を食べながらお茶を楽しむ光景は良いものです。1350年前、水門跡は城内の水を排水するために造られたものでしたが、時代を経ていくうちに、暑い夏には涼を取る憩いの場や、古代の歴史を感じる名所となりました。また、住吉宮という水に関係する神様が祀られ、信仰の場やお潮井を取る神聖な場所へと変化し、お潮井を通じて人々をつなぐ役割も果たしているように思います。

※問合せ先

教育学習課 ふるさと歴史係
電話92-2200

基肄城築造1350年

基肄城を知る ⑮

— 基山を守ってきた人々 —



基肄城跡のある基山は、様々な人々によって守られてきました。基肄城跡を、国の特別史跡に導いてくださった専念寺のご住職・久保山善映先生を始め、郷土史家の方、大学の先生など、専門的な知識を持つ方もいらっしゃいます。市民の地道な力も忘れてはなりません。

「基山が大好きでごみ拾いを始めました。」

そうおっしゃるのは、詩吟サークル「清翠会」の大久保桂子さん。ご主人の退職を機に、役場のアダプトプログラムを利用してごみ袋の提供を受け、13年前にメンバー12名ほどでごみ拾いを始められました。現在は、田中和子さんと2人で1か月に2回、瀧光徳寺の駐車場から山頂まで、ごみを拾いながら登られています。初日の出の参拝者で汚れたトイレも見られるに

掃除を始められたそうです。

「最初は、自家用車に運転手しか乗れなくなるほどごみが出ていましたが、今ではほとんど無くなりました。」と朗らかに話されています。また、他のメンバー5名と、山頂駐車場のすぐ上に芝桜を植えてから今年で11年目を迎えました。イノシシが荒らすため、昨年から彼岸花を植えてくださっています。

「基肄山歩会」の方々には、基山の山道を守っていただいています。平成5年に「山登りを通じて趣味の振興並びに会員相互の親睦と融和を図る」ことを目的に発足しました。当初の会員数は53名、22年経った現在は34名となりました。山登りを楽しみながら、基山の荒れた山道の復興に尽力されています。平成19年には基肄城からつつじ寺として知られている大興善寺まで



写真1 基肄山歩会の活動風景

の道を「きのくに古道」と称して、木竹の伐採・整備と案内標識の設置がなされました（写真1）。このことによって、昔は大興善寺の参詣の道として頻繁に使われていた山道が見事に甦り、大興善寺を復興した玉岡誓恩氏の名前を彫った道標などの文化遺産も再び目の見えることができました。毎年4月と9月には、瀧光徳寺の裏から山頂までの整備や、水門跡から山頂への歩道の点検もされています。



写真2 かつての基山山頂
(土塁線が良く見える)

これは、基山中学校の登山行事前に、生徒が安全に登れるように毎年行われています。そして、何より忘れてはならないのは、基山のお膝元である6区の方々の力と基山への思いです。古くから基肄城の東北門近くまで田畑をつくり、牛の飼料のために毎朝草刈りをして、土塁線が見える草原に近い山を維持してくださいました（写真2）。丸林の方からは「山火事があれば、山を駆け上がり、火を消しに行った。」と聞いたことがあります。戦後、基山は戦中の乱伐を改善する国の植林計画を受けて、植林がなされてきました。小倉分（6区）の原野は3代表の名義で登録していましたが、当時の区長や名義者代表の努力、組合員の現物・現

金出資により昭和36年に「城戸生産森林組合」が発足しました。これは、個別に所有されている山林を生産森林組合に集積することで、全体に調和のとれた維持管理と手入れをし山を守ろうと、当時、ほとんどの6区在住者が加入して結成された組合です。現在では、その大部分を基肄城保存地区として町に譲渡されましたが、それまでは全組合員が協力し、手弁当で定期的な草刈りや枝打ち、間伐等の手入れを続けられ、健全な森林として親から子へと引き継ぎながら維持してこられました。

基山はこのほかにも多くの人々の思いで、それぞれの時代に合わせて守られてきました。これからも次世代へと守られ続けていくことでしょう。

※問合せ先

教育学習課 ふるさと歴史係
電話92-2200

基肄城築造1350年

基肄城を知る 19

— 基肄城と烽火 —

「烽火」と書いて何と読むかご存知でしょうか。正解は「のろし」と読みます。

烽火とは、煙や火を使って、遠くにいち早く情報や合図を伝える方法のことです(図1)。

「のろし」の漢字には、「烽火」、「烽煙」、「烽燧」などの字が使われますが、後に「狼煙」とも表現されるようになります。これは、狼の糞を混ぜて焼くと煙が直上することから、「狼煙」という漢字が当てられていたようです。犬よりも狼の方が肉食であるため、その糞には動物性タンパク質の残滓がより多く含まれます。



図1 烽火のイメージ図

ており、よく煙が上がったのではないかとはいわれています。

基肄城が造られた頃から、日本では本格的に烽火が使われ始めたようです。基肄城築造のことも記されている『日本書紀』

には、「対馬、壹岐、筑紫国等に防と烽とを置く。」という文があります。「烽」とは、烽火のこと

を指しており、国家をあげて烽火を使った通信制度を確立させようとしていたことが分かります。その後、8世紀には、対馬から近畿地方にある藤原京・平城京までの通信手段として烽火が採用されますが、10世紀以降になると衰退していったようです。

では、基肄城では、どこで烽火を上げたのでしょうか。現段階では、その場所を正確に特定することができていません。しかし、城内において烽火を上げ



たのではないかと推定される場所が数か所あります。それは、東峰の頂上付近にある「つつみ跡」や、その少し下方にある「鐘撞跡」などです。これらの地点は、周辺の地形に比べ高台状になっており、現在は木でよく見えませんが、木が無ければ、広く見晴らしがきく所に位置しています。しかし、推定の根拠は高台で見晴らしがきくという点などで、これまでに烽火に関するような遺物や遺構などは確認されていません。

さて、烽火の伝達はどのくらいの速さなのでしょう。平成23年に開催された、第2回古代山城サミット山鹿・菊池大会で烽火リレーが行われました。その結果から、ある程度の速度を推し量ることができそうです。このときに行われた烽火リレーは、大宰府政庁跡から鞠智城跡まで



写真1 草スキー場の丘から見える烽火
(中央よりやや左側が大宰府政庁跡、
右上が大野城跡)

の14か所をリレー方式で、烽火を上げてつないでいくものでした。前の地点で烽火が上がったことを確認した上で烽火を上げ、次の地点に伝えていきます。1番目が大宰府政庁跡、2番目が大野城跡、そして3番目の地点として基肄城跡から烽火を上げました。基肄城の場合、現在、城内は木で覆われているため、大宰府・大野城方面を見ることができません。そのため、城外にはなりませんが、現在草スキー場として使用されている小高い丘から、大宰府政庁跡や大野城跡で上げられた烽火を確認しました(写真1)。確認後、基山公園の駐車場から烽火を上げ、次の地点である宝満川堤防につな

ぎました(写真2)。このように、大宰府政庁跡から鞠智城跡までの約100kmを烽火でつないだ結果、約1時間かかりました。その速さは、時速100kmほどにもなりません。

現在では、携帯電話やインターネットなどの通信制度が整えられ、遠くの海外にいる人にも、情報を簡単に伝えることができます。しかし、そのようなものが無い時代には、烽火を駆使して、少しでも早く情報を伝えようとしていました。当時の人々の苦勞と知恵の数々を「烽火」からもうかがい知ることができます。

※問合せ先

教育学習課 ふるさと歴史係
電話92-2200



写真2 基山公園駐車場での烽火

基肄城築造1350年

基肄城を知る(20)

―築造1400年に向けて(最終回)―



れました。

「基肄城」と書いて何と読むか、本特集コラムを読んでいただいている多くの方は既に「きいじょう」と思います。このように、「きいじょう」と読めるということこそが、基肄城をより知っていただいたあらわれの一つではないでしょうか。

ご存じのとおり、基肄城は、665年に大宰府の南にあたる基山とその東峰にかけて築造された古代山城で、2015年(平成27年)には築造1350年を迎えました。これを契機に、基肄城をより多くの人に知っていただくことを目的に、町内で様々なイベントや事業などが展開されました。築造1350年を記念したコンサートや講演会、草スキー大会、歴史民俗資料館での特別展示などのイベントや、基肄城跡への案内板設置や基山展望台の改修などの事業も行わ

平成21年度から実施されてきた、水門の石垣保存修理事業も今年度で完了し、壮大な石垣や石積からは、古代の優れた技術を感じることが出来ます。さらに、この事業に伴う調査では、石垣の中から新たに3つの通水溝が見つかり、基肄城の新たな発見となりました。

昨年の10月には、西日本各地の古代山城を有する関係自治体が基山町に一堂に会して、保存や活用などについて話し合う「古代山城サミット基山大会」が開催されました。現地研修として、サミット参加者の方々が水門や基山山頂を見学され、町民の方々による道案内や解説などを通して、基肄城を広く知っていただく機会となりました。このときに解説をしていただいた「文化遺産ガイドボランティア

ア」は、町内にある数多くの文化遺産を調査して、その成果を活かした解説を行うなど、今年度から新たな活動も行っています。

第20回を迎えた、基肄城築造

1350年記念特集コラム「基肄城を知る」シリーズは、今回で最終回となりました。平成26年8月から毎月15日号に、基山や基肄城などに関係するコラムを掲載してきました(別表)。

基肄城は、たくさんの方々に守ってきていただいたおかげで、築造1350年を迎えることができました。この節目を迎え、改めて多くの方々に基肄城を知っていただけたのではないのでしょうか。

築造1400年目に向けて、基肄城は動きだしたばかりです。築造1400年のときには、日本だけではなく、世界の人も「Kijō」と読めるようになっていたら、と密かに期待しながら締めさせていただきます。

これまでのご愛読に感謝いたします。本当にありがとうございます。

※問合せ先
教育学習課 ふるさと歴史係
電話9212200

基肄城築造1350年記念特集コラム
「基肄城を知る」タイトル一覧

回	タイトル	掲載号
1	私たちの町の宝 基肄城跡	平成26年8月15日号
2	基肄城築造の記録 ー基肄城築造1350年の証ー	9月15日号
3	新たに発見された通水溝	10月15日号
4	古代の法律『令』に定められた防火対策 ー基肄城にある建物ー	11月15日号
5	基肄城の城壁と門 ー土塁、石塁、門礎ー	12月15日号
6	大宰府の防衛線	平成27年1月15日号
7	基肄城の瓦と瓦窯	2月15日号
8	荒穂の神さまと基山	3月15日号
9	万葉集に出てくる道、『城の山道』	4月15日号
10	記録に見える軍団、『基肄団』	5月15日号
11	鎌倉・室町時代の基肄城	6月15日号
12	絵画資料にみる基肄城	7月15日号
13	基肄城を国の宝へと押し上げた人	8月15日号
14	みんなで手入れした山、基山	9月15日号
15	基山山頂にそびえる天智天皇欽仰之碑	10月15日号
16	草スキーも有名な基山	11月15日号
17	きやまのお潮井取り	12月15日号
18	基山を守ってきた人々	平成28年1月15日号
19	基肄城と烽火	2月15日号
20	築造1400年に向けて(最終回)	3月15日号